## 書評

## 地球史が語る近未来の環境

北村晃寿

日本第四紀学会 町田 洋・岩田修二・小野 昭編 東京大学出版会,2007,237pp.,2400円.

本書の構成は、「はしがき」と4部からなり、各部の表題は、第1部「地球環境変動と第四紀研究」、第2部「気候変動と海面変動」、第3部「植物一動物一人類の関わり」、第4部「人為改変と自然災害、自然保護」である。各部は、1ないし3つの章がある。第1部は「1第四紀研究から地球環境を考える」、第2部は「2 地球温暖化と海面上昇」と「3 アジアの大規模デルタ」、「4 気候の近未来予測」、第3部は「5 東アジアの植物の多様性と人類活動」と「6 哺乳類の絶滅史から現在と近未来を考える」と「7 持続的資源利用の人類史」、第4部は「8 ため池や堀の堆積物からたどる大気環境の変遷」と「9 土地改変と地表環境マネジメント」と「10 国立公園上高地の未来像」である。

本書の趣旨は、「はしがき」に次のように紹介されている.「本 書は、数十年前~数万年前に環境はどのように、またなぜ変わっ たかを調べるという研究の観点から、現在を理解し近未来の展望 を試みるという趣旨で企画・編集された。そして研究の現状をふ まえて、次の三点に焦点をあてるよう心がけた。第一は、課題の 性質上、日本列島だけでなくグローバルな現象の説明と課題を明 らかにすること。第二は、現在の人間の活動が地球環境に与えて いるインパクトの激しさがどのようなものであるかを明らかにし、 具体例を示すようにした。第三は、歴史に学んで今を見直すとい う観点である。」とある. この趣旨を理解した上で、古生物学に関 連すると思われる第1部,第2部,第3部の5~6章を書評の対象と した. なお, 本書には対象読者が記されていないので, 著者に問 い合わせたところ,「専門家向きではない」との回答をいただいた. 全般的な感想を述べると, 書評の対象箇所の内容は玉石混交であ る. "石"の章と評価した理由は、最新の情報を取り込んでいない ことや論理的根拠の提示がないことである。また、"玉"と評価し た章の中には、執筆者自身のレビューが邦文誌に紹介されている ものがあり、専門雑誌を容易に読める環境にある人には、それら を読むことも薦める. なぜならば, 本書に掲載された引用文献は あまりにも少ないからである.

評者の興味を最も引いた章は「4 気候の近未来予測」で、その内容は新しいものなのだが、この章で最も重要な図2と図4はグレイスケールで印刷されたため、これらの図の読み取りはできないので、それらに関する議論の妥当性も評価できない。しかも、図の出典が記されていないので、原著にあたることもできない。予算の都合もあるのだろうが、読者へのサービスは不十分と言わざるをえない。

最後に評者が高く評価した箇所を紹介する。それはコラムのいくつかで、そこには最新の情報が提供されている。例えば、コラム⑦にはRuddimanの $2003\sim2005$ 年の研究とそれに対するEPICAグループの反論が紹介されている。これは"10万年周期"の問題及び酸素同位体ステージ11(北半球の日射量のパターンが、現在と似ている間氷期)の継続期間に関する議論である。

以上を要約すると、わずかながらの紙面しかないのだが、コラムを読むことは推奨できる。他の箇所を読む際には、玉と石が混在していることを念頭に入れる必要がある。大変辛口な書評となってしまったが、第四紀学会員でもある私の立場としては、これはやむを得ないところである。

# 学会記事

# 日本古生物学会(2005·2006年度) 第5回定例評議員会議事録

日時: 2007年6月28日 (木) 10:00-13:00

場所:大阪市立大学学術情報総合センター10階研究者交流室

出席:北里会長,安達,天野,安藤,平野,平山,加瀬,近藤,前田, 間嶋,真鍋,西,小笠原,大野,大路,小澤,棚部,生形, 植村,柳沢

欠席:松本名誉会長,甲能 (→植村),長谷川,尾田 (→西),瀬

戸口 (→前田), 冨田 (→真鍋)

書記:豊福,鈴木庶務幹事

## 報告事項

#### 常務委員会報告(生形)

#### 庶務(生形)

- 1. 北海道大学 COE 新・自然史科学創成プログラムより, 国際シンポジウム「The Origin and Evolution of Natural Diversity」への共催依頼があり, 承諾の返事を送った.
- 2. 日本学術会議よりイノベーション推進検討委員会報告「科学者コミュニティが描く未来の社会」を受け取った. 本会より提出したイノベーション案が抄録されている.
- 3. 日本学術会議のアンケート「学協会の機能強化方策検討のための学術団体調査」に回答した.
- 4. 株式会社杏林社と電子投稿査読システム Scholar One のサブライセンス及びサポート契約書を交わした.
- 5. 地質情報整備・活用機構より協賛依頼のあったGUPI GEOFORUM-3「地域観光資源とビジター産業」に関して、本会が協賛を承諾する前にGUPIのウェブページに協賛(予定)と掲載されていたことについて、GUPIの岩松会長より詫び状が届いた。
- 6. 本会が共同発起人となっている「地質の日」第一回共同発起 人会(3月13日14:00-15:30,産総研丸の内サイト)の案内があり、 会長が出席した。来年5月10日の「地質の日」に向けて実行委 員会が立ち上がった。
- 7. 独立行政法人科学技術振興機構より依頼のあった「学協会の会議開催予定・発行刊行物」に関するアンケートに回答した.
- 8. 評議員選挙投票用封筒と評議員選挙投票用紙在中封筒をそれぞれ1,200部ずつ印刷した. また,本郷局から料金受取人払の承認を受けた.
- 9. 永年に渡って会員であり続け本年度で退会する大森昌衛君と早坂祥三君に感謝状を送付した.
- 10. 学術振興会より第23回国際生物学賞(受賞分野:遺伝学)の 推薦依頼が届いた. 評議員MLで推薦を募ったが,推薦は無かった.
- 11. 日本郵政公社より「個人情報を含む電子情報媒体盗難についてのご連絡とお詫び」を受け取った。それによると、東京貯金事務センターの職員が車上荒らしの被害にあい、振替口座情報等が記録された電子媒体が盗難される事件があったが、その中に本会の口座情報も含まれていたとのこと。今のところ具体的な被害情報は確認されていない。
- 12. 3月29日に評議員選挙投票用紙を事務局より発送し, 5月10日に静岡大学で開票作業を行った.
- 13.「化石」の図について田中裕一郎君より使用許可申請があり、 使用許可書を送った.対象論文と転載先は以下の通り.

対象論文:氏家由利香・氏家 宏 (2006), 79, 43-59, 図 8 転載先:田中裕一郎 (2007) 琉球弧周辺海域における生物起源 記事 2007年10月

- 粒子の物質循環について. 地質ニュース.
- 14. 学術著作権協会の学協会現況調査票に回答した.
- 15. 信州大学山岳科学総合研究所より「信州フィールド科学賞」 応募案内を受け取った.
- 16. 会計規定の素案について税理士に相談した. 指導料は一般会計より支出.
- 17. 文部科学省より文部科学大臣表彰の受賞通知があり、科学技術賞理解増進部門に佐藤たまき・長谷川善和両君が、若手科学者賞に藻谷亮介君がそれぞれ選ばれた.
- 18. 学術振興会より日本学術振興会賞の推薦に関する案内を受け取った. 学会は推薦母体となれないが、評議員MLで情報を流した.
- 19. 日本地質百選選定委員会より協力依頼を受け取った. 具体的には、選定箇所を機関誌やHPに掲載するよう依頼があり、これを了承した
- 20. 地球惑星科学連合より、高校生発表セッションへの協力依頼 があった. 評議員MLで協力を募った.
- 21. 学術会議より「科学のミスコンダクトー科学者コミュニティの自律をめざして一」出版の案内があった.
- 22. 丸善より、「図説アフリカの哺乳類-その進化と古環境の変遷」 (Turner, A. & Anton, M. 著, 冨田幸光訳)の案内DMを古生物 学会員に送付したいという伺いがあったが、個人情報保護に鑑 み、出版社等には会員情報を提供しないこととした。代案として、 丸善には「化石」に当該書籍の広告を掲載するよう提案した。
- 23. 学術賞・論文賞の賞状の筆耕と学術賞のメダルの刻字を発注して準備した.
- 24. 文部科学省より平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞及び若手科学者賞候補者の推薦依頼があり、評議員 MLで推薦を依頼したが、今のところ推薦は無い、文部科学省へ の推薦締め切りは7月13日である。
- 25. 群馬県立自然史博物館の企画展「アイスエイジ 氷河時代を 生きた動物たち」の後援承諾書を送った.
- 26. UniBIo Pressの生物系学会及び大学図書館向けセミナー「生物系ジャーナルの挑戦ーより明確に、より広く、その情報を伝えるために」の後援承諾書を送った。
- 27. 化石に掲載された論文の北海道大学学術情報コレクション (HASCUP) への収録・公開申請に対して許諾書を送った. ただし,刊行版に限るという条件付である. 対象論文は以下の通り. 対象論文:西弘嗣・高嶋礼詩・初貝隆行・圓入敦仁・酒井利彰・斎藤常正(2000),(68),17-18
- 28. 化石の図について三笠市立博物館の栗原憲一君より使用許可申請があり、使用許可書を送った. 対象論文と転載先は以下の 遥り
  - 対象論文:栗原憲一・川辺文久(2003), (74), 36-47, 図 4
  - 転載先: Kurihara, K., Kawabe, F., Hirano, H. and Tanabe, K. (2007) Ammonoid fauna and stratigraphy of the Cretaceous Yezo forearc basin, Hokkaido, Japan: field trip guide for the 7<sup>th</sup> International Cephalopd Symposium, Present & Past. Bulletin of the Mikasa City Museum, Natural Science, No. 11.
- 29. 大学評価・学位授与機構より、機関別認証評価に係わる専門 委員(平成19年度分)の選考結果について通知があり、本会推 薦の候補者の選考が見送られた.
- 30. TPPSJNSの図についてカンサス大学のThomas N, Taylor氏より使用許可申請があり、使用許可書を送った. 対象論文と転載先は以下の通り.
  - 対象論文: Ohana, T. and Kimura, T. (1995), 178, 122-141, figs.
  - 転載先: Taylor, T. N. Biology and Evolution of Fossil Plant. Academic Press.
- 31. 丸善より、「図説アフリカの哺乳類-その進化と古環境の変遷」 (Turner, A. & Anton, M. 著、冨田幸光訳) の案内ビラを「化石」 の発送時に同封したいという伺いがあったが、化石には宣伝ビ

ラなどを同封しない基本方針を確認して断った.

32. 会員歴50年以上の永年会員に感謝状を送ることとした.

#### 涉外(植村)

- 1. Paleontological Research の平成19年度科研費(研究成果公開 促進費)は不採択であった。例年に比べ、補助金予算の大幅な 減少があったことも影響している。
- 2. 国際惑星地球年(IYPE)小委員会が3月29日(学術会議)に 開催され,その資料を回覧した.
- 3. 国立大学教育研究評価委員会専門委員候補者に平野弘道君と 北里 洋君の2名を推薦した.

#### 会計 (加瀬)

1. 平成18年度収支決算報告案及び平成19年度予算案を作成した. 行事(柳沢)

- 1. 第156回徳島例会では、例会参加者206名、子供ワークショップ56名、普及講演会123名、懇親会110名であった。収支は、収入791,200円、支出419,675円であり、371,525円の黒字であった。 黒字の理由は会場費等の節約による。
- 2. 古生物学スプリングワークショップ2007「The 解剖学」(2007年3月19日-21日)を開催した. 参加者は34名で、学会からの補助金57,760円を使用した.
- 3. 2007年年会・総会のシンポジウムのタイトルを「古生代及び中生代における温室期の地球生物相」に変更した. 開催予告を「化石」、学会HP、および各会員宛メールで行った.
- 4.2007年年会・総会(大阪市立大学,6月29日~7月1日)の 講演申込数は、シンポジウム6、特別講演2、一般講演129であった。ポスターが多かったので5件口頭にまわってもらった結果、 口頭86、ポスター43となった。講演申し込み確認のために、講演一覧を学会HPに掲載した(5月2日)。プログラムを5月下旬に発送、予稿集は6月8日に完成した。
- 5. 大阪年会では、マスコミの取材に対応しなければならない事態が予想される。行事係を中心に、企画・広報係と会場が協力して対応する。
- 6. 大阪での総会で、電子投稿査読システム Scholar One について Admin の高島 麗氏にデモンストレーションを行って頂くよう 準備を進めている.
- 7. 第157回宇都宮例会(2008年2月1日~3日)の準備を進めている。シンポジウム「中~高緯度の両極性分布を持つ生物から見た地球史(世話人:相田吉昭・酒井豊三郎・鈴木紀穀)」が、普及講演案として「栃木の大地に眠る化石たちー微化石から哺乳類まで(柏村勇二・青島睦治・布川嘉英)」が検討されている。
- 8. 2008年年会・総会の仙台での開催を次回評議員会に諮る予定.
- 9. 第158回例会に、琉球大学・沖縄県立博物館から共同開催の申し込みがあった。
- 10. 地球惑星科学連合大会の折に予定されていたコンベンションセンター合同セミナー(5月23日)が中止となった.

#### 国際交流 (大路)

- 1.5月20日に行われた第二回地球惑星科学連合国際委員会に出席 した.新委員長に加藤照之氏(日本測地学会,東大地震研),副 委員長に藤田英輔氏(日本火山学会,防災研)と公文富士夫氏(日 本地質学会,信州大)が選出された.また,学術会議会員の河 野 長氏から,国際対応の小委員会の整理方針が示された.
- 2. イギリスのLibrary of Japanese Science and Technologyから PR誌の配送中止の依頼があり、対応した.

#### 企画・広報(間嶋)

- 1. 学会HPを学情研サーバーに移設し、正式運用を開始した. しばらくは京大サーバーと並存させるが、いずれ学情サーバーに 一本化する予定.
- 2. 講演予稿集のPDFをHPからダウンロードできるようにした、容量が1GBしかないので、学術会議ニュースなどの学会外をソースとする情報については、リンクを張ることによって対応している
- 3. 新HPのコンテンツとして,高校生向けの大学情報(リンク), 学会規則集などのアップを予定している.ウェブデザインや構

造などについての意見を募集している.

#### 友の会(安達)

- 1.「化石」81号を発送し、19年度会費請求書を同封した。5月末 現在で87名の会員が会費納入済み、納入済み会員には2007年大 阪年会プログラムとともに会員証を送付。未納会員には、納入 督促状を同封した。
- 2. 予稿集の販売価格を検討した.
- 3. 会計について、3月31日付けの残高証明を取った.
- 4. 会費の振込通知書が担当まで届かない郵便トラブルがあった. 郵便局へ問い合わせし、確認後会員証を発送した.

#### 電子ジャーナル(真鍋)

- 1. 国立情報学研究所・電子図書館連絡会議(2月21日)に出席した.
- 2. 第7回SPARC Japan連続セミナー「計量書誌学からジャーナル・論文のパフォーマンスを測る」(3月5日)に出席した.
- 3. UniBio Press理事会・定期総会(3月14日)に参加した. PR の電子投稿アドミニストレーターは今年度からUniBio Pressで雇用し、SPARCからの委託金で賄う. 日本アレルギー学会誌がUniBio Pressに加わることになった.
- 4. 国立情報学研究所に「大学図書館からみたSPARC Japan 事業 評価」調査票を提出した.
- 5. UniBio Press セミナー「ジャーナルのパフォーマンスをいか に高めるか」(4月5日,学術情報センター)に出席した.
- JSTのJournal@rchive事業に「化石」の電子化のための申請を行った。
- 7. UniBio Press セミナーが国立情報学研究所(5月15日)と京都大学付属図書館(5月17日)で行われた。トムソンサイエンティフィックの宮入暢子氏によると、2003年と2004年の論文に対する2005年のPRのインパクトファクターは0.64と試算されるとの発表があった。ただし被引用件数のトップ3は、特集号のSeilacher論文、Fedonkin論文、Waloszek論文である。
- 8. 国際学術情報流通基盤整備事業 (SPARC Japan) パートナー 誌合同会議 (6月12日;国立情報学研究所) に真鍋が出席した. 今後, NII は個々の学協会の補助は終息させてゆくとのことである. 古生物学会としては, BioOne.2で公開可能なXMLファイルの作成費用と電子投稿システムのAdmin人件費を申請する予定である.

#### 会員の入退会(前田)

前回の評議員会議以降,入会30名(半田直人君,佐藤 光君,近間英明君,山田健太郎君,高嶋礼詩君,坪井美里君,早川達也君,尾林 充君,岡嶌亮子君,山口浩司君,高橋隼人君,河村篤司君,荷福 洸君,菅原拓矢君,小島佑季彦君,本田豊也君,須田宏美君,曽根正敏君,倉沢篤史君,薗田哲平君,中野智之君,千徳明日香君,岩田北斗君,津田龍一君,西田 梢君,安井金也君,國府田禅君,中井敏博君,浅井秀彦君,野崎 篤君),退会29名(富岡芳彦君,熊谷 毅君,高巣 学君,吉村悦子君,河合武臣君,秋山紘胤君,舟木泰智君,板垣久治君,圓藤弘典君,友杉貴茂君,瀬戸雅浩君,鎌田誠一君,三村麻子君,木本善永君,土居寿子君,山本和幸君,角坂清博君,福田芳生君,佐藤洋子君,溝口秀勝君,岸田容司郎君,渡邊美樹子君,戸田健太郎君,大森昌衛君,一川眞澄君,池田 正君,早坂祥三君,堀川秀夫君,磯見 博君),逝去2名(解良正利君,多井義郎君)であった。また,長期会費滞納者103名を除籍した。2007年6月28日現在の会員数は1,076名である.

#### 編集状況報告

#### 欧文誌 (小笠原)

- 1. 11巻1号は7編を掲載し出版した. 11巻2号は6編の掲載を 予定し、校了した. 予定通り6月末に刊行見込み. 11巻3号は 5編を受理し、9月末出版に向けて英文校閲中である. 11巻4 号は2編を受理した. 現在修正25編, 査読10編, 掲載拒否6編 である
- 2. 2007年会(大阪市立大学)シンポジウムから7論文を特集形

式で11巻3号に刊行を計画している.

#### 化石(西)

- 1.82号は「日本海の生物相の変遷」シンポジウムの特集号として10編の論文の掲載を予定し、初校を完了した。9月出版を予定している。
- 2. 今後予定している特集は以下の通りである. 83号: 古生物学のアウトリーチ(世話人: 辻野泰之君). 84号: 未定. 85号: 中~高緯度の両極性分布を持つ生物から見た地球(世話人: 相田吉昭君).

#### 特別号(真鍋)

Saito et al. の復刻版 CD の出版が印刷会社の倒産により遅れていたが、今年度中に発行出来る予定である.

## 連合・学術会議報告

#### 地球惑星科学連合(北里)

第5回連合評議会に出席した. 現在46学協会が参加している. 運営会議メンバーの交代があり, 新運営会議議長に木村 学氏が就任した. 今年の連合大会は, 5月19日(土)~24日(木)の6日間開催され, レギュラーセッションの「地球生命史」のほか, スペシャルセッションの「化学合成生態系の進化」が開催された. 来年の連合大会は5月25日(日)~30日(金)の6日間,幕張メッセで開催予定.

#### 学術会議 (北里)

- 1. 古生物学会会員のうち,学術会議会員として平 朝彦君が, 連携会員として斎藤靖二君,岡田尚武君,北里 洋君,西田治 文君,真鍋 真君,大路樹生君の6名が参加している.
- 2. 第2回地球惑星科学推進分科会(5月21日;幕張メッセ)に出席した。地球環境問題に関する課題別委員会の設置を提案中である。また、各大学における地学教育の現状や、急増しつつあるポスドクの置かれた状況把握などのために、アンケートを実施することにした。
- 3. 第二部の自然史・古生物学分科会では、博物館法の改正に関する対外報告書を準備中である。また、フィールドサイエンスに関するシンポジウムを企画している。

#### 自然史学会連合(甲能:代理生形)

- 1. 新たに日本地衣学会の加入があり,現在38学会が参加しており, のべ会員数は45,000人となった. 古生物学会会員の西田治文君 が代表を務めている.
- 2. 博物館法改正や指定管理者制度導入などに関して, 意見の集 約や様々な検討を行っている.

## 分類学会連合(佐々木;代理生形)

第18回役員会に出席した. 2008年1月12日に国立科学博物館新宿分館で、シンポジウム「動物界高次分類群の系統と分類:発生から分子へ(仮題)」を行う予定.

#### 将来計画委員会(北里)

2年間で8回の委員会を開催し、古生物学会としての今後の方向性について検討を重ねてきた。具体的には、1) 古生物学の推進、2) 研究資料の保全と管理(archive)、3) 後継者育成(初等中等教育、高等教育)、4)社会貢献の四つの課題を柱として議論してきた。今期の活動報告を「化石」に掲載する予定。

#### 2007·2008年度評議員選挙報告(生形)

65 才未満の特別会員269名の被選挙人名簿を作成し,評議員選挙を行った。3月29日に投票用紙を事務局より発送,4月27日投票締め切り,5月10日に山本なぎさ普通会員の立ち会いの下,静岡大学で開票作業を行った。投票総数395通,有効投票数394通,総票数6934票で,当選者は以下の通り(A,B,C順、敬称略)。安達修子,天野和孝,安藤寿男,遠藤一佳,長谷川四郎,平野弘道,加瀬友喜,北里洋,甲能直樹,近藤康生,前田晴良,間嶋隆一,真鍋真,松岡篤,西弘嗣,尾田太良,小笠原憲四郎,大野照文,棚部一成,冨田幸光,生形貴男,植村和彦,矢島道子,柳沢幸夫.

記事 2007年10月

## 審議事項

#### 学術賞・論文賞の決定

学術賞・論文賞を決定した. 受賞者と受賞題目は以下の通り.

学術賞:栗田祐司君「新生代渦鞭毛藻類の化石層序についての研究」

学術賞:入月俊明君「新生代貝形虫類の古生物学的研究」

論文賞:嶋田智恵子君·谷村好洋君「Spatial variability in valve morphology of *Neodenticula seminae*, an oceanic diatom in the subarctic North Pacific and the Bering Sea」Vol. 10, pp. 79-89.

論文賞: 伊藤泰弘君「Functional shell morphology in early developmental stages of a boring bivalve *Zirfaea subconstricta* (Pholadidae)」Vol. 9, pp. 189-202.

論文賞: 久保田克博君「Charophyte gyrogonites from the Lower Cretaceous Kitadani Formation of the Tetori Group in the Takinamigawa area, Katsuyama City, Fukui Prefecture, central Japan」Vol. 9, pp. 203-213.

#### 特別会員の推薦

三本健二君,西園幸久君,伊東佳彦君,馬場健司君,横井隆幸君, 斉藤 毅君,木曽太郎君,安井敏夫君,奥田昌明君,渡部真人君, 花方 聡君,河潟俊吾君,佐野弘好君,荒井晃作君,藤田和彦君, 田中源吾君,坂倉範彦君,田口公則君,東條文治君,鈴木雄太郎 君の計20名が特別会員に推薦され,これらを承認した.会員資格 変更を受諾するかどうか個別に打診する.

#### 名誉会員の推戴

長谷川善和君,猪郷久義君,加藤 誠君,小畠郁生君の4名を 名誉会員に推戴する案を総会に諮ることとした.

#### 2008年年会・総会開催地の決定

東北大学・仙台市科学館共催で、2008年7月4日(金)~6日(日) の3日間、仙台市桜ホールで開催することとした。

#### 第157回例会シンポジウム案について

第157回宇都宮例会のシンポジウム案「中~高緯度の両極性分布を持つ生物から見た地球史」(世話人:相田吉昭君,酒井豊三郎君,鈴木紀毅君)を承認した。2008年2月1日(金)13:00~17:15に宇都宮大学・大学会館多目的ホールで行われる予定。

#### 2006年度決算について

平成18年度決算案を検討し、総会に付議することとした. 2006年度決算から、一般会計と特別会計が一本化されている.

#### 倫理綱領案並びに会則への条文追加について

常務委員会での審議に基づく倫理綱領の修正原案と会則への条 文追加案を検討し、原案通り総会に諮ることとした。会則改訂案は、 現行第25条を第26条へ繰り下げ、新たに第25条として以下の条文 を追加する。

第25条 本会に対して、会員が科学者倫理に抵触したとの疑義・申し立てがあった場合には、会長は倫理委員若干名を指名し、臨時の倫理委員会を招集する。

#### 会計規則案について

常務委員会での審議に基づく会計規則の庶務原案を検討し, 一部修正の上,総会に付議することとした.

#### 学会賞選考委員会及び賞の委員会運営内規一部改訂について

学術賞の副賞廃止にあたり、「学会賞選考委員会及び賞の委員会 運営内規」の改訂原案を総会に付議することとした. 改訂内容は 以下の通り.

学会賞選考委員会及び賞の委員会運営内規(2007年6月28日部分 改訂)

#### II 賞の委員会

4. 学術賞は賞状及びメダルとし,論文賞及び貢献賞は賞状とする. → (改訂案) 4. 賞の内容は賞状とする.

#### NII-ELSコンテンツの機関レポジトリでの利用許諾について

国立情報学研究所のNII-ELS(電子図書館)コンテンツの各機関リポジトリでの利用について、許諾管理をNIIに包括的に委託することとした。対象は、TPPSJNSのバックナンバーと、PRと

化石の出版後1年以上経過したコンテンツである.

#### 次期評議員会への申し送り事項の確認

次期評議員会への申し送り事項を下記のとおり確認した. 1) 学会財政の現状と将来計画, 2) 年会・例会の見直し (開催回数,開催形態,開催地,学会からの補助金額,会場費,インターナショナルセッション,地球惑星科学連合との関係), 3) 学会活性化のための表彰制度の見直し (学術賞と貢献賞の間を繋ぐような新しい賞の創設の検討), 4) 会務体制の強化 (UniBio Press 専属常務委員,行事委員会,友の会関連委員など), 5) 会員名簿発行に関する方針作り (個人情報保護法施行のため,2005・2006年度は発行を保留), 6) 評議員選挙の選挙管理の見直し (現職評議員の庶務が選挙管理を行うことの是非), 7) 現行慣例と合わない会則条文の見直し.

# 日本古生物学会(2007·2008年度) 第1回定例評議員会議事録

日時: 2007年6月28日(木)13:30-16:30

場所:大阪市立大学学術情報総合センター10階研究者交流室

出席:安達,天野,安藤,遠藤,平野,加瀬,北里,近藤,前田, 間嶋,真鍋,西,小笠原,大野,大路,棚部,生形,植村, 柳沢

欠席:松本名誉会長,長谷川,甲能(→植村),松岡(→柳沢), 尾田(→西),冨田(→真鍋),矢島(→北里)

書記:豊福,鈴木庶務幹事

## 審議事項

#### 会長選挙

小笠原憲四郎君を会長に選出した.

## 前評議員会からの申し送り事項の確認

前評議員会からの申し送り事項を下記のとおり確認した. 1) 学会財政の現状と未来予測, 2) 年会・例会の見直し (開催回数,開催形態,開催地,学会からの補助金額,会場費,インターナショナルセッション,地球惑星科学連合との関係), 3) 学会活性化のための表彰制度の見直し (学術賞と貢献賞の間を繋ぐような新しい賞の創設の検討), 4) 会務体制の強化 (UniBio Press 専属常務委員,行事委員会,友の会関連委員など), 5) 会員名簿発行に関する方針作り (個人情報保護法施行のため,2005・2006年度は発行を保留), 6) 評議員選挙の選挙管理の見直し (現職評議員の庶務が選挙管理を行うことの是非), 7) 現行慣例と合わない会則条文の見直し.

## 常務委員の選出

10名の常務委員を以下の通り選出した(A, B, C順, 敬称略):遠藤, 加瀬, 近藤, 前田, 真鍋, 間嶋, 西, 大路, 生形, 柳沢. 第1回常務委員会を開催し, 次の通り各係を決定した. 庶務:生形. 国際交流 (兼UniBio Press):真鍋. 会計:間嶋. 行事:近藤. 会員:前田. 渉外:柳沢. 欧文誌編集:大路・遠藤. 特別号編集:加瀬. 「化石」編集:西. なお,企画・広報係は会長氏名で甲能君に依頼することとした. 友の会・学会図書,自然史学会連合,地球惑星科学連合,分類学会連合の各係については,会長に一任することとした.

#### 会計監査の選出

国立科学博物館の谷村好洋君に依頼することとした.

### 将来計画委員の選出

会長に一任することとした.メンバーが決まったら評議員にメーリングリストを使って報告する.

## 賞の委員の半数改選

生形貴男君,西 弘嗣君の2名を選出した.非改選の江崎洋一君(幹事),指田勝男君,小笠原会長,大路PR編集長の6名で2007年度賞の委員を構成する.

#### ポスター賞選考委員の選出

以下の5名を選出した.(敬称略) 天野和孝,北里 洋,西 弘嗣, 大野照文, 生形貴男.

#### 2007年度事業計画・予算案について

新年度の事業計画と予算案について検討し、原案通り総会に諮 ることとした。

#### 総会議事の確認

総会の議事次第と段取りを確認した.

#### その他

- 1. ポスター発表・口頭発表の内容を写真撮影する場合には、事 前に発表者の了解を得るよう促すことを会場に掲示するという、 従来の方針を確認した.
- 2. 大阪年会で想定されるマスコミ取材への対応について確認した。

#### 2007年度総会

2007年6月29日(金) 15:30~17:15,大阪市立大学学術情報総合センター10階会議室で開催された.出席103名,委任状16名の計119名が参加(定足数108名).全ての議事が異議無く了承された.議事次第は以下の通り.

- 1. 開会
- 2. 会務報告
- ・規則・規定・内規の変更点.
- ・2006年度の会員動向:入会55名,退会39名(うち逝去4名),除籍103名,会員数1,076名.永年会員顕彰.
- ・行事関連:島根年会と徳島例会の報告, 次回例会(宇都宮), 年会(仙台)の予定.
- ・学会誌: PRをISI に登録申請中, J-stage での電子化, 電子投稿 査読システム運用開始, 科研費不採択.
- · 評議員選挙結果, 新年度会長 · 常務委員.
- ・その他:学会HP移転, IPA役員決定, 文部科学大臣表彰受賞.
- 3. 地球惑星科学連合, 学術会議, 自然史学会連合報告
- ·地球惑星科学連合:組織,活動報告.
- ・学術会議:組織,任務,活動報告,21期に向けて.
- ・自然史学会連合:組織,活動報告,今後の予定.
- 4 名誉会員の推戴

長谷川善和君,猪郷久義君,加藤 誠君,小畠郁生君.

5. 学術賞・論文賞の授与

学術賞:栗田裕司君,入月俊明君.

論文賞:嶋田智恵子君·谷村好洋君, 伊藤泰弘君, 久保田克博君.

- 6. 倫理綱領制定並びに会則への条文追加案
- 7. 会計規則の制定について
- 8. 電子投稿査読システム Scholar One について
- 9. 2006年度決算報告
- 10. 2007年度事業計画および予算案
- 11. 閉会

# 各賞贈呈文および受賞ポスター

## 2006年度日本古生物学会学術賞

### 栗田裕司君:新生代渦鞭毛藻化石層序の研究

栗田裕司君は東北大学理学部地質学古生物学教室を1982年に卒業後,石油資源開発株式会社に入社し,石油掘削現場の業務,同社技術研究所における第三系の層序学的調査,堆積性有機物の研究,堆積盆地発達史に関する調査・研究などに従事してきた。その間,渦鞭毛藻化石層序の研究にも取り組み,石油技術者海外研修制度によるカナダ地質調査所の堆積・石油地質学研究所での留学を経た後,北海道の古第三系を中心とした渦鞭毛藻生層序や古

環境の解析を精力的に行っている (栗田・小布施, 1994; Kurita and Matsuoka, 1994). その成果は、同研究所の小布施明子氏との共著論文『北海道北部,基礎試錐「天北」における第三系~上部白亜系有機質微化石層序(渦鞭毛薬化石・花粉胞子化石)』(1998)が石油技術協会論文賞を受賞していることに現れている.

栗田君は1998年に同社技術研究所・古生物グループ長となり、2000年3月には北海道大学に提出した『Paleogene dinoflagellate cyst biostratigraphy in northern Japan』により博士(理学)を授与されている。その後、2001年4月に新潟大学助教授に転出し、理学部地質科学科に所属し、現在は新潟大学自然科学系(理学部)准教授である。また、2002年からは日本堆積学会誌編集委員長を務めている。

栗田裕司君のこれまでの研究で注目されるのは、長く新第三系と考えられてきた北海道羽幌地域の新生界の一部が海成始新統であることを明らかにした研究(栗田ほか,1992; 栗田・小布施,1994)で、この羽幌地域における古第三系の発見や、ひきつづく石狩・日高地域の漸新統の再検討などによって、北海道の新生代テクトニクスの再構築がなされている(栗田・横井,2000)。その後、さらに渦鞭毛藻化石の研究をサハリンと北海道全域に展開し、2000年に斬新な年代対比を構築している。

日本の渦鞭毛藻生層序の研究は1970年代に松岡數充君などによる研究で開始されたが、国際的な渦鞭毛藻生層序は1960年代から北海やオーストラリア周辺の石油探鉱の進展に対応して大きく進展し、1970年代末までにジュラ系・白亜系・古代三系の化石層序の大枠が確立されているのに対し、日本ではこの分野の研究が数少ない現状である。

栗田君によるレビュー論文で指摘されているように、渦鞭毛藻化石研究に関する利点は、陸生から海生生物由来の有機物微化石として広範な古環境情報をひとつの分析手法で得ることができること、中生代から現世まで幅広い地質年代に対応すること、少量の試料でも分析可能なこと、試料の風化の影響を受けにくいこと、さらに珪質岩など堅硬な岩石でも処理できることなどである。また弱点として、タフォノミーが複雑で化石化過程の理解が十分でないこと、定量化が難しいこと、さらに処理に高度な熟練と工程が多く、時間がかかるうえコストがかさむ事などがあげられている。

渦鞭毛藻は最古の記録がシルル紀から知られるものの、普遍的に産するのはトリアス紀中期以降で、海成から汽水成堆積物中からである(栗田、1997). 渦鞭毛藻は光合成バクテリアや珪藻に次ぐ海洋の一次生産者であり、食物網の重要な担い手でもあり、赤潮原因生物としても知られ、さらにサンゴ虫と共生する褐虫藻なども渦鞭鞭毛藻に属し、生態的にも休眠性接合子など、生物学的に特異性に富んでいる。これら渦鞭毛藻の特性をいかした古生物学的研究の発展を、今後大いに期待したい.

栗田裕司君のこれまでの研究は、白亜系から新生代にいたる渦鞭毛藻化石層序の確立に大きく貢献したが、とくに続成作用を受けて硬質化している堆積岩からの有機物の検出、さらに汽水域から遠洋の沖合相まで、海と陸をつなぐ堆積物中に産する特性を生かした研究で多大な成果をあげ、また最近総括した北日本の古第三系渦鞭毛藻層序の研究(Kurita, 2004)は、とくに精度の高い統合微化石生層序の確立にさらに進展を遂げたものとして、高い評価を得ている。日本古生物学会は、ここに栗田裕司君のこれまでの努力と成果を高く評価し、学術賞を贈って今後一層の発展を期待する。

#### 入月俊明君:新生代貝形虫類の古生物学的研究

貝形虫類は、古生代に出現して以来、現在まで多様な水域に生息する微小な甲殻類で、化石として保存されやすい石灰質の2枚の殻を有する。入月俊明君は、後期新生代の貝形虫類について、日本各地の地層から化石種を報告・記載し、化石記録の充実に努めてきた。さらに、環境変化や地質学的イベントと貝形虫化石群集との関連性を、統計的手法を駆使するとともに、タフォノミー的解析や地質学的データと統合することにより、優れた成果を挙げてきた。

入月君の貝形虫化石に関する研究は、東北大学における修士論

記 事 2007年10月

文として行った秋田県太平山南西部地域の層位学的研究において, 貝形虫化石について考察したことを端緒とする. その中で, 同君 は鮮新統笹岡層から産する貝形虫化石の群集解析を行うとともに, 堆積物の粒度分布と殼サイズとの関連性に基づいて貝形虫殼の 死後の運搬作用を見積もり、堆積環境の復元を行った. この研究 は、堆積環境の推定において化石の生態学的側面のみならず堆積 学的側面をも考慮する必要のあることを示す好事例を示したもの で、日本古生物学会報告紀事に掲載された (Irizuki, 1989). さら に、博士論文として、大桑-万願寺動物群を含む地層から多産す る好冷性貝形虫種の系統分類と進化に関する研究を行った. 特に, Hemicytherinae 亜科貝形虫の殼前縁部に認められる縁辺毛細管に ついて, 個体発生を通じた分布パターンの変化に初めて着目し, 独自の解析法を用いて系統関係を推定した結果、対象とした同亜 科の新属を含む8属21種が3つのグループに分けられることを示 した. これらの成果は国内外の種々の学術雑誌に掲載されて高く 評価され,特に日本古生物学会報告紀事に掲載された論文 (Irizuki, 1993) については、1993年度日本古生物学会論文賞が授与された.

その後、貝形虫種の系統関係や貝形虫化石群集と環境変動との 関連性を探るため、当時はまだ化石情報が不足していた中新世以 降の地層から産する貝形虫化石に主眼を置いて、各地で層位学的 研究を精力的に行った. その成果の一例として、16.5~15 Maの温 暖期(Mid-Neogene Climatic Optimum)に堆積した岩手県門ノ 沢・末の松山層中に、好冷性種が卓越する層準(約16 Ma)があ り、それにより温暖期が新旧の二期に分けられることを明らかに したことがあげられる(入月・松原, 1994; Irizuki and Matsubara, 1995). また、愛知教育大学に着任後は、主に中部地方に分布する "第一瀬戸内区中新統"について、浮遊性微化石に基づく層序と年 代を明らかにし、堆積相解析を行った上で、前期中新世における 貝形虫群集を総括した. すなわち, 好冷性種あるいはその祖先種 がすでに17.8 Ma前後の酸素同位体比極大期(Wright and Miller (1992)のMiocene isotope 1b) に出現していたことを明らかにし、 加えて、多くの新種記載により分類学的整理を行ったのである (Irizuki et al., 2004).

また、中一後期鮮新世における日本海側地域の貝形虫化石群集 を, 当時の指導学生らと共同で調査し, 氷期と間氷期の群集に明 瞭な相違を見いだすとともに、当時の日本海における中層水の特 性を明らかにした. これらの成果は国際誌を中心に掲載され,高 く評価されている (Yamada et al., 2002, 2005; Irizuki et al., 2007). さらに、入月君は貝形虫を用いて人間生活に直結する問題の解 明にも力を注いでおり、例えば、地震や津波の周期性と津波堆 積物の認定に関する研究(入月ほか, 1998, 1999; Fujiwara et al., 2000; 佐々木ほか, 印刷中), 第四紀の海面変動の復元に関する研 究 (入月ほか, 1998; Masuda et al., 2002など), 過去50-150年間に おける人類活動による環境変化を復元する研究(入月ほか,2003; Yasuhara et al., 2003) などの成果をあげており、これらを通じて、 他分野・他研究機関の様々な研究者との交流・連携により、沿岸 域の防災、閉鎖的内湾環境の現状把握と環境改善へ向けた計画の 作成などに貢献しつつある. これらは古生物学における新たな方 向性を示す研究であり、その発展は貝形虫類に限らず、他の分野 に大きな影響を及ぼすと考えられる. 日本古生物学会は、ここに 入月俊明君のこれまでの努力と成果を高く評価し、学術賞を贈っ て今後の一層の発展を期待する.

## 2006年度日本古生物学会論文賞

嶋田智恵子君・谷村好洋君: Spatial variability in valve morphology of *Neodenticula seminae*, an oceanic diatom in the subarctic North Pacific and the Bering Sea. Paleontological Research, vol. 10, no. 1, pp. 79-89 (2006). (北太平洋亜寒帯域およびベーリング海における *Neodenticula seminae* (珪藻類) に見られる地理的変異)

Neodenticula seminae (Simonsen and Kanaya) Akiba and Yanagisawa, 1986は、Simonsen and Kanaya (1961)により記載された亜寒帯域北太平洋で優占する現生の海生浮遊珪藻である.亜

寒帯域北太平洋では海洋の一次生産を珪藻が支えていることが知られており、全珪藻群集の40~50%を占めるこの種は北太平洋に於ける海洋の一次生産、そして生物地球化学循環を支える重要なプランクトンである。また、この種を含むNeodenticula属の珪藻は、進化速度が速く生層序の重要な指標属ともなっている。このように、Neodenticula属は海洋環境や年代層序学の指標となっているにもかかわらず、その基礎的な生物学的情報には不明な点が多かったのが現状である。

嶋田智恵子・谷村好洋両君による本論文は、1955年に北大「お しょろ」丸によるNORPAC航海の折りに北太平洋全域より採取さ れたプランクトンネット試料(金谷太郎君によって保存され,最近, 国立科学博物館に寄託された)を用い、Neodenticula seminae の珪 酸質殼の形態について走査型電子顕微鏡を用いて詳細に検討した ものである. 両君は, 詳しい形態観察と生物計測を行い, 地域的 に偏りがある二つの顕著な種内変異を区別した. 一つのタイプは, 蓋殼が薄く,繊細な基底隆起(basal ridge)を持つグループで,親 潮域に多く分布する. 二つめのタイプは, 厚い珪酸質の蓋殻を作 り,基底隆起も太く,親潮域以外の北太平洋に広く分布する. 嶋 田・谷村両君は、これらのタイプの違いを、基底隆起の頂軸方向 の長さと接頂軸方向の長さの比 (Ba/Bt) として定量的に表すこと ができることを見つけ、この指標に基づいて群集を厳密に識別す ることに成功した. さらに,形態変異と海洋環境との相関を議論し, 珪藻における殻の厚みの変異は珪酸分が枯渇する環境に現れるこ と, そして親潮域では, 春季ブルーム後に薄い殻のタイプが現れ ることから、北太平洋に見られるN. seminaeの蓋殻の変異は、栄養 塩の量、ことにSiとNの濃度を反映していると推定した. この議 論は珪藻にみられる形態変異が過去の海洋の栄養塩濃度を復元す る有用な指標である可能性を示唆したもので、古海洋学的に重要 な発見であると言える. N. seminae に見られるのと同様な蓋殻の形 態変異は、鮮新世および中新世の同属の化石種、さらには類縁の 絶滅珪藻属にも存在しているので、今回の発見は、時空における 珪藻の形態変異の意味およびその古海洋への応用の可能性を示し ており、その微古生物学への波及効果は極めて大きい.

以上のように、嶋田智恵子・谷村好洋両君による珪藻の形態変異に関する研究は、珪藻の古生物学の発展を著しく促すとともに、栄養塩レベルの推定の可能性を示した点で古海洋学的にも大きな貢献を行った。本研究は、今後、化石種に関する形態変異の検討や、形態変異に関する遺伝子レベルの研究へと進展することが大いに期待できる。日本古生物学会は、嶋田智恵子・谷村好洋両君の努力とその研究成果を高く評価し、ここにに論文賞を贈り、今後の一層の発展を期待する。

伊藤泰弘君: Functional shell morphology in early developmental stages of a boring bivalve *Zirfaea subconstricta* (Pholadidae). Paleontological Research, vol. 9, no. 2, pp.189-202 (2005). (穿孔 二枚貝ニオガイモドキの初期殻の機能形態)

Pholadidae (ニオガイ科) に属する二枚貝は泥岩や砂岩、火成岩 などの岩石の他、木材、サンゴ、貝殻、軟泥底等、固結した基質に 穴を掘って生活する穿孔習性を特徴とするグループである. このよ うな穿孔二枚貝は、ニオガイ科のほか数科で知られているが、ニオ ガイ科のような様々な底質に穿孔できるグループは他にはない. ニ オガイ科の殻の形態は前後に細長いものから短いものまで多様であ り, そのような形態の違いは穿孔運動の機能形態的な違いを生じる. このことから、一般に細長い殻のものは柔らかい岩石に、短いもの は硬い基質や木材などに穿孔し、中間的なものは岩石などに穿孔す る傾向が見られる. 古生物学においては、個体発生と系統発生との 関係は進化学的に興味ある対象であり、その中でも幼体、あるいは 小さい成体を含めた小さいサイズで生じた形態や行動の個体発生上 の変革の研究は、高次分類群の起源や進化過程の解釈に有用である. すなわち, 成体が環境や機能に強く影響されるのに対して, 幼体は それが少なく、より系統を反映した原始的な特徴を備えている. 小 さいサイズで生じた形態や行動の変化は、たとえ小さな変異でも大 きな適応上の不連続を越えて進化する可能性を秘めている. 幼体や

化石82号 記事

小さいサイズにおける個体発生過程の情報は、化石記録によって証拠づけられた系統進化の進化的方向性や起源を解釈するうえで非常に重要な意義を持つ.

伊藤泰弘君はこのような穿孔習性が、どのように進化したかを 知る手がかりとして、Zirfaea subconstricta (ニオガイモドキ) の幼 生が浮遊生活から基質に穴を掘って底棲生活に移行する間にみら れる穿孔機能の発達過程について, 走査電子顕微鏡観察をもとに, 詳細な議論を行った. 伊藤君は、静岡県御前崎の潮間帯の泥岩底 に生息する Z. subconstricta を採取し、人工飼育を行い、本種の幼生・ 初期稚貝における連続成長過程の標本を研究試料とし、各発達過 程での殻形態や穿孔行動を観察した. その結果, これらの初期稚 貝の穿孔運動には,成貝での穿孔様式とは独立した,機能形態的 に共通の特徴が見られることが明らかとなった. すなわち, 殻頂 と腹縁を通る背腹軸について前縁を開き、その際に左殻の後背縁 を右殻の内側にもぐり込ませて重ね合わせる前開き穿孔運動と, このような殻の重ね合わせ運動を可能にする左右非対称な殻形態、 蝶番構造, 筋肉の配置である. また, この初期稚貝における左右 非対称性や重ね合わせ穿孔運動はPholadidae科の初期稚貝の共通 した特徴であることが明らかとなった. これまでにPholadidae科 に属する殻形態の記載はされているものの、 殻形態と穿孔機能の 観点からはほとんど議論されたことがなく,本論文は機能的に特 殊化した形態の進化に発生的側面から迫るものである. 日本古生 物学会は伊藤泰弘君の努力とその研究成果を高く評価し, ここに 論文賞を贈り、今後の一層の発展を期待する.

久保田克博君: Charophyte gyrogonites from the Lower Cretaceous Kitadani Formation of the Tetori Group in the Takinamigawa area, Katsuyama City, Fukui Prefecture, central Japan. Paleontological Research, vol. 9, no. 2, pp. 203-213 (2005). (福井県勝山市滝波川地域における手取層群北谷層(下部白亜系)から産出した車軸藻造卵器)

車軸藻とは、汽水から淡水域に生息する緑藻類の一種で、造卵器と呼ばれる雌性生殖器官はその表面に炭酸カルシウムを沈着することから化石として保存されやすく、しかも多産することが知られている。そのため、欧米や中国では、花粉や貝形虫化石などとともに非海成層の有力な示準化石として盛んに研究がなされている。しかし、日本では、車軸藻化石の研究例は極めて少なく、しかも保存状態が不良などの理由から、これまで産出が報告されるに留まっていた。

久保田克博君は、福井県勝山市滝波川地域に分布する手取層群 北谷層から非常に保存状態のよい車軸藻化石を発見し、3属5種 (Clavator harrisii var. reyi, Mesochara harrisi, M. stipitata, Mesochara sp., Stellatochara sp.) を同定し、それらの詳細な記載を行なった。 さらに、産出する車軸藻化石の生層序学的な知見から、北谷層の車 軸藻化石含有層の年代がBarremianであることを明らかにした。こ の結果は、これまで非海生二枚貝化石に基づき指摘されてきた北谷 層の年代と調和的であり、より精度の高いものであるといえる。

従来,日本においては、車軸藻化石は非海成層における有力な 示準化石であるにもかかわらず、その生層序学的な検討がなされ ていなかった. 久保田君は、車軸藻化石を同定し、車軸藻化石生 層序を適用することで、その含有層の年代を明らかにした. 本論 文は日本の車軸藻化石についての最初の本格的な研究であり、従 来、議論が必ずしも定まらなかった非海成層の年代論に、新たな アプローチ法を提供したという点で貢献が大きい. 今後、日本の 他地域から報告されている車軸藻化石と比較検討を行なうことで、 車軸藻化石生層序の確立や地層の広域的な対比につながることが 期待される. 非海成中生層の対比は、重要な研究課題であり、本 研究が高精度の生層序学的な検討を行う際の基礎的なデータにも なりうる. さらに、将来的には、本邦に分布する非海成層と、欧 米や中国をはじめとする大陸に広く分布する非海成層との間の詳 細な対比の確立に寄与することが期待される.

日本古生物学会は, 久保田克博君の努力と研究成果を高く評価し, ここに論文賞を贈り, 今後の一層の発展を期待する.



#### 各賞受賞者

左から入月俊明君(学術賞). 栗田裕司君(学術賞), 北里 洋会長, 嶋田智恵子君(論文賞), 伊藤泰弘君(論文賞), 久保田克博君(論文賞)

## 2007年度年会優秀ポスター賞

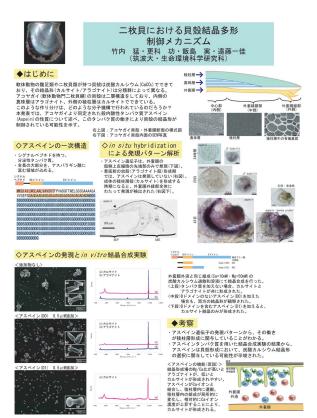
竹内 猛君・更科 功君, 飯島 実君, 遠藤一佳君 二枚貝における貝殻結晶多形制御メカニズム

#### 冨田武照君

"ナイフかフォークか?"—歯根形態に着目した化石板鰓類の摂食 行動の推定—

#### 野村真一君

本邦中生界および新生界から産出する化石ミョウガガイ類の発見 とその意義



竹内 猛君ほかのポスター

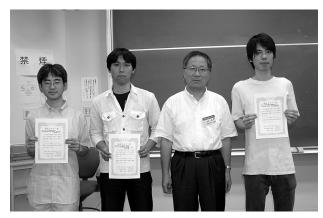
記 事 2007年10月



冨田武照君のポスター



野村真一君ほかのポスター



ポスター賞受賞者 左から冨田武照君,野村真一君,北里 洋会長,竹内 猛君

# 05 · 06年度将来計画委員会活動報告

2005・2006年度日本古生物学会将来計画委員会は、「古生物科学を魅力あるものにするために、古生物学会は何をすべきか」を目標として、2年間に8回の会合を持ち、議論検討を行った。具体的な検討は、1)古生物学の推進、とくに学際性・国際性を発揮し、安定した研究環境(研究資金、ポストなど)を確保するには何をすべきか? 2)研究資料の保全と管理(archive)、3)後継者育成(初等中等教育、高等教育)、4)社会貢献(古生物学を社会にアピールする)、の四つの柱について行った。また、議論の結果、実行に移すべき項目については実施を試みた。

議論を行った項目と具体的な活動は以下の通りである.

- 1. 学会の学際性・国際性の確保: 1) 古生物学の学際性を高 めるためには関連学会・連合体との積極的な連携が重要である. このことから, 地球惑星科学連合には同連合創設時から参加し, 総務, 財務, 国際, プログラム, 地学教育の各委員会に委員を 出し,運営を支えている. また,地球惑星科学連合大会ではレギュ ラーセッション「地球生命史」, スペシャルセッション「化学合 成生態系の進化をめぐって」を主催した. 当会は自然史学会連合, 分類学会連合にも参加しており, それぞれ分野固有の問題点を 議論した. 進化学会には複数の当会会員が複数のセッションを 主催し,進化(古)生物学に関する議論をリードしてい る. 2) 当会フラッグジャーナルであるPaleontological Researchの質の向上と国際化が、古生物科学の発展と若手研究 者の質の向上に重要である. このために、ISI登録申請を行い、 また、PR webを通じた電子投稿査読システムを整備し、投稿か ら出版までの透明性とスピードアップを図っている。3) 学会 の国際的なパートナーとして国際古生物学協会(International Paleontological Asocciation, IPA) との関わりを強化すべきであ るとの観点から、IPAにはcouncil member 1名および correspondence member 1名を送り、活動を支えている. また, IPA活動の柱の一つである "Paleopark" Project と連携して、目 本に於けるPaleopark 選定を考えている.
- 2. 学会の在り方: 若手研究者の活躍の場としての,学会の年会・例会の活性化について検討を行った. 若手研究者育成を目指し,さまざまなショートコースプログラムを実施し,研究の底上げが必要である. また,若手研究者に国際的な舞台で活躍をしてもらうためには,日常的にinternational sessionを持ち,英語で発表・議論する場を設けることを提案する.
- 3. 研究環境の確保: 若手研究者を分野に止め、活躍してもら うためには、研究環境の確保と整備が必要である.このために、 1) 古生物学に関連したトピックを含むGlobal COEが大学で立

ち上がることを応援するとともに、2) 大型研究費の確保を目指して、特定領域研究を申請した。これらは、複数の若手研究者に研究の機会を与えることに繋がる。

- 4. 学術行政に於ける学会の位置: 古生物学は、科学の重要な一角を占めているべきである. そのためには、日本の科学行政との関わりが重要である. 1)日本全国80万研究者を代表する組織である日本学術会議に参画した. 第20期日本学術会議には、当会会員である会員1名、連携会員6名、小委員会委員2名が加わっており、古生物学分野および関連領域の重要性をアピールしている. その活動の中心は第二部基礎生物委員会・応用生物学委員会,および第三部地球惑星科学委員会共管分科会である「自然史・古生物分科会」である. また、第三部地球惑星科学委員会とも連携した活動を行っている.
- 5. 研究資料の保全と管理に関する問題: 古生物学の進展のためには、研究資料・標本類が重要である. この観点から博物館活動の重要性を認識し、博物館法改正に向けた検討を行っている日本学術会議自然史古生物分科会と連携している. なお、中規模大学の研究者が所持する自然史標本類の保全と博物館への登録を進めることが、今後の世代交代期を迎えるに当たり必要である.
- 6. 後継者育成: 将来の古生物学を担う,児童生徒を育成することが重要であることを認識している. そのために, 1)学校科目「地学」を守る一環として,学習指導要領における地学・古生物項目および内容の強化を求める, 2)ショートコースの奨励(cf. the 解剖学), 3)古生物普及書の企画(Paleopark 計画と連携した「化石露頭100選」)などを進めている.
- 7. 社会貢献: 一般の国民が古生物学の真の面白さを知り、古生物学者の中から優秀な業績が生まれていることを積極的にアピールすべきである。そのためには、メディアを通じて研究成果を発信すると共に、世間に認められる賞の受賞を勧めることが、古生物学を社会に認知させる一つの道である。この観点から、2006年度には文部科学大臣表彰2件を推薦し、科学技術賞理解増進部門に佐藤たまき・長谷川善和両君が、若手科学者賞に藻谷亮介君がそれぞれ選ばれた。
- 8. 将来計画委員会の在り方: 05・06年度委員会は、日本学術会議、大学、研究機関の再編期に当たっていたことから、緊急性の高い実務的な内容を議論し実行に移すという、会長の私的諮問機関の役割を持たせた. しかし、古生物学の将来を見据え、「学問として古生物学をどう発展させるべきなのか、またそれを担う優れた研究者集団をどう育成するのか」を妥協することなく議論するのであれば、20~30代の若手を中心とした委員会を構成し、運営すべきであろう.

#### \*参考:

05·06年度将来計画委員会委員:北里 洋,生形貴男,遠藤一佳,加瀬友喜,北村晃寿,間嶋隆一,大路樹生,大野照文,千葉 聡,西 弘嗣,岡田尚武,真鍋 真

同アドバイザー: 平 朝彦,斉藤靖二,平野弘道,西田治文

# 醵金者御芳名

#### 三戸太郎, 真鍋 真, 奈良正和, 田中源吾, 小松俊文, 北村晃寿

平成19年3月23日~平成19年9月18日までの間に、上記の方々から本会へ醵金を賜りました。古生物および本会の活性化のため有効に使わせていただきます。ご厚志に対し深く御礼を申し上げます。

醵金のための郵便振替口座番号は次の通りです。 00130-6-776553 日本古生物学会・醵金口

# お詫びと訂正

化石81号掲載の化石友の会の柱に削除すべき項目(所 十三・ 西 弘嗣・上栗伸一)がありました。お詫びして訂正致します。

また、化石80号に掲載された「ふおっしる 日本産化石カメ類研究の概要」(平山 廉 著)のp.53の「佐賀県小佐々町の下部中新統野島層群の非海成層からは、頭骨の保存された大型イシガメ科やスッポン科などが多産しており、」の部分の「佐賀県小佐々町」は「長崎県佐世保市小佐々町」ではないかとの指摘がありました。ここに訂正させていただきます。

# 編集委員会より

本号は、2006年6月の日本古生物学会2006年年会で開催されたシンポジウム「日本海の生物相の変遷と環境変動—過去、現在そして未来へ向けて」の特集号として出版させていただきました。世話人の絶大なる御努力と御協力により講演者全員の論文を掲載することができ、すばらしい特集号となりました。日本海という日本の自然にとっても重要な地域の研究の最近の知見がまとめられていますので、ぜひご覧ください。

また、編集員会も下記の2人の方に新規に編集委員としてお願いすることになりました。今後とも、よりよい和雑誌にしていくよう努力いたしますので、ご意見・ご希望がございましたら編集委員会にお寄せ下さい。

(西 弘嗣)

このたび、編集委員に加わることになりました。最近の「化石」を改めて眺めてみましたが、年とともに紙面が工夫されて読みやすくなる一方、研究論文の掲載が減るなど、「化石」の役割が次第に変化してきていることが分かります。今後も、会員の皆様にとって親しみやすく、役に立つ雑誌であり続けられるように努力したいと思います。よろしくお願いします。

(沂藤康生)

このたび新しく「化石」の編集委員に加わりました、東京学芸大学の佐藤と申します。専門は古脊椎動物学で、これまでは主に首長竜に関する研究をしてきました。本誌の編集を通じて様々な化石に関して学びながら、今後の研究や教育活動を進めて行きたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

(佐藤たまき)